

## はじめにー失われた技芸ー

地質踏査法のおかれていた現状を端的に表すために、お話のタイトルに「秘伝」という言葉をつけた。近代の技術は、技術者集団の間で基本的な方法が共有され、一定水準の精度が保証され、それが社会に認知されてはじめて技術と呼べるものになる。秘伝は社会に開かれていないから秘伝なのである。

地質踏査が秘伝になる危険性は大学の地質学にはじめから内在していた。地質踏査が大学の地質学の主流であった時代においてすら、専門分野以外の人にも分かるように地質踏査の技術的特徴や地質図の読み方を説明するということを怠ってきた。たとえば、どのようにして地質図の精度ー出来映えーを評価するか、どのような山歩きがそれを保証するか、地質図にそれをどのように表現するか、といったことも議論されることはなかった。

そして、この20年くらいの間に山を歩いて地質図を作成するという研究行為そのものが大学から消えていった。地質踏査法は「失われた技芸」になった。興味深いことに、問題の20年間は金融バブルに酔い、額に汗をかいて身体を汚すことをばかげたことと見なす風潮が世の中に蔓延していた時期といみじくも一致している。

「山を歩ける学生がいなくなった」といわれて久しい。山を歩けるとは地質踏査ができることを指さす。世の中の風潮を敏感に感じ取って学生も変わったが、最近では大学教員も山を歩けなくなった。大学教員自身が山歩きを学生に見せないと、学生の山歩きは育たない。大学の地質踏査技術が疲弊しても大学教員は困らない。困らないような研究をしているからである。だがしかし、地質系専門職業人ー地質コンサルタント技術者が主流ーとして巣立つ学生にとって、山を歩くことが求められるだけでなく、実際に歩けることが大きな武器になる。今日の大学の不甲斐なさには企業もさじを投げ、いまではほかの技術で対応する傾向もでてきている。地質系専門職業人の社会的貢献なくして、大学の地質学が社会に認知されることはない。このままでは、大学の地質学教室の崩壊も近いかも知れない。すでに地質学教室の名称は日本の大学から消えている。

わたしは、副題にある通り、わたしの個人的な山歩きをお話する。今から10年くらい前になるが、わたしの山歩きの師匠である広島大学名誉教授 原 郁夫先生を中心に、独立行政法人 産業技術総合研究所 研究コーディネーターの佃 栄吉君(同級生)や応用地質株式会社技術本部副部長の山根 誠さんらと地質踏査法の本を書こうという話が持ち上がったことがある。しかし残念なことにそれぞれが多忙を極め絶ち切れになった。

ところが、わたしは、2000年の春に突然高知大学理学部自然環境科学科防災科学コースに奉職することになり、地球の医者として地質系専門職業人を養成し世の中に送り出すことが業務となった。わたしの研究室の卒論と修論の教育の柱には地質踏査と空中写真判読(地形図読図)の訓練を据えたものの、地質踏査技術の訓練ではいろいろな面で苦慮を強いられることになった。2001年の6月、山形大学の大学院生むけの集中講義で地質踏査法の講義と実地訓練をおこなうこととなり、改めて、わたしの山歩きを検証する機会をもった。

ここでは学生と若手地質技術者を読者対象者に考えている。是非とも学生諸君には、現

場で地質構造モデルを立て地層を追跡してそれを検証する地質踏査の醍醐味を味わっていただきたい。地質踏査を楽しむことができる学生が増えてくれば、失われた技芸が大学の地質学に復活する日も遠くない。